

今度ははっきり言えた

「あれっ」と思ったが、もう遅い。
蜂だ！

見る見るうちに、中指の付け根あたりがはれて来た。
「ああ、ああ」と泣きたくなる思いだった。

汗でびしょぬれのハンカチを、手に巻き、
痛いのをこらえながら歩いた。

道筋にお寺が一つやっとなった。

大きな岩に寺の名が刻まれている。

寺の名を聞かなかったので、
それがその寺かわからん。

中を、恐る恐る、のぞき込み、
入り、住職の住む家を探した。

表札がないか探した。

どうも、住職の名がちがうようだ。

「そうか、八幡町は広い、大きいのだ！

寺は一つや二つではないかも！

これは困った！」

と、思うと力が抜けて来た。

「もうこれで、九月までお別れか」と思うと、
何気なく、悲しく感じる。

